

混和会とは、共に許し合いながら、他の人格を尊重し、共に生きる和の構築を目指す集いです。

ほとけの混和会だより

平成三十年七月

東光院

仏の混和会

第134号



貞心尼と良寛様

裏を見せ、表を見せて散る紅葉

良寛様は新潟県出雲崎の代々名主兼神職を務める橋屋山本家の長男として生まれ、幼名を栄蔵と言っておりました。栄蔵十八歳の時、名主見習いとして家業を学びますが温厚な性格の栄蔵は名主の職にそぐわず二十二歳の時、出家を志し、岡山県玉島の円通寺国仙和尚の元で修行に専念されます。そして三十三歳にて国仙和尚より悟りの印可を頂くのですが、寺の住職に成る事は無く六年間の諸国行脚の旅に出ましたのでした。その後、寛政八年良寛四十歳の頃新潟県に戻り、草庵を転々

とした後、新潟県燕市国上の五合庵に二十年、そして乙子神社の社務所に移り住んだ頃、尼僧の貞心尼さんと出会います。良寛さんは七十歳、貞心尼は三十歳の出会いでした。そして貞心尼は「君に斯く相見ることの嬉しさもまだ覚めやらぬ夢かと思ふて夢のようだ」と恋心を抱いていたのです。良寛様も「君や忘る 道や曉るる 音信(おとずれ)のなき」 「また来るって言ったのに、手紙もくれないなんて、私のことは忘れてしまったのかい?」などと貞心尼の訪れを待ち焦がれて居ました。そして晩年を迎えた良寛様は病に伏して「裏を見せ表を見せて散る紅葉」と詠まれます。良寛様は人々に對してもおろこも飾ることも無く共に心を許し合い安心と癒やしを得ていたのです。人の心は、正しい思いの元に思い思われていないと癒やしも安心も得られないのですね。一切見返りを求め無い無条件の愛を私は「慈悲」と言っております。私の課題とさせて頂きたく存じます。 亮観拝

思い思われる環境が 眞の癒やし

私達は様々な不安を抱きながら日々の生活を営んでおります。これは家族の崩壊に伴って、思い思われる環境を失った事が起因しているように思われます。仏様が私達を思い、私達が仏様を思う。夫が妻を思い、妻が夫を思う。親が子を思い、子が親を思う。そして他人同士であつても、共に相手を慕い幸を願う思い。このような環境に眞の癒やしがあるように思われるのです。

しかし昨今の孤独社会に於いては正しい思いを抱く環境が無いと言うのが現実かと思えます。悟りを会得する方法に八正道という教えがあります。その一番目が「正思惟」と続くのですが要するに抱きし物事を見て正しい思いを正さなさい、そこから悟りと言う安心に抱かれる癒やしの世界が開かれて行きますよと言っているのです。

そこで他人同士でも思い思われる環境を築くことが出来ないものか、と久しく案じておりましたら最近「インラケッチ」と言う



マヤ文明の遺跡

同士でも思い思われる環境を築くことが出来ないものか、と久しく案じておりましたら最近「インラケッチ」と言う

言葉を知りました。これはマヤ文明の言葉で、マヤ人は共に相手の目を見ながら指相撲のように手を握り親指を合わせて「インラケッチ」と挨拶されたそうです。この意味は「私はあなた、あなたは私」と言う意味だそうです。「オー、これは良い、人ど人、共に理解し合うのに良い挨拶かもしれない。」と思いきわすお便りの課題として思いました。

そして、この意味を少し詳しく調べて見ました。するとマヤの人たちは、動物や植物だけでなく山や太陽、星、火、風、などすべてのものにはスピリットがあると考へてその事が解ってきたのです。そしてスピリットがあるものと魂のレベルで繋がるときに「インラケッチ」と言うのだそうです。

マヤ人は宇宙と世界の人々と一体と成って全ての人が魂レベルで繋がると「インラケッチ」と言える世界を創っていききたいと思つて居たのです。私は大変おどろきました。実は釈尊も大自然大宇宙と一体となり様々な生命を慕い敬いながら万人の幸を願いなさいと言っているのです。人の思うところは長い年月や処が変わつても変わりなく無く、大いなる安心と、共に生きる癒やしの道を求めて居るのですね。 亮観拝



日本仏教に登場する仏様を、毎号少しずつご紹介。今回は明王部の大威徳明王を紹介いたします。

● 明王部 だいゐとくみょうぶ 大威徳明王

前号では象に乗った仏様でしたが、今回は水牛に乗った仏様。三つ目の顔が六面、腕も五も六本も生えて、西方の守護者されております。サンスクリット語での名前は「ヤマインタカ」と言います。ヤマとは「死神」、インタカを「倒す者」という意味で、直訳すると「死神をも倒す者」という意味に成ります。

大威徳明王は元々文殊菩薩の化身と言われており、チベット仏教によると、

『とある修行僧が悟りを開く直前に盗賊に襲われ、近くにいた水牛共々首を切られて殺されてしまいました。悟りに至る直前に殺された修行僧の怒りは凄まじく、側に落ちていた水牛の頭を自らの身体に繋げ、盗賊を皆殺しにしています。その後も怒りは止まらず、さらには関係の無い人々までも無差別に殺す悪鬼(死神)となってしまうらしい。それを見かねた文殊菩薩は悪鬼に対抗すべく自分自身も恐ろしい

姿(大威徳明王)に変身して悪鬼に対抗した。』という伝説から生まれた仏様。

そのため、悪いものを降伏させ導くという点から戦勝祈願や悪霊退治の本尊としてきました。

比叡山延暦寺の麓にある日吉大社には「大威徳石」という石が境内に在り、「大威徳明王が宿る霊石」として伝えられており、この石の前で多くの戦勝祈願の修法が行われてきました。

また、大威徳明王が水牛に乗るのは諸説あり、牛の顔した悪鬼に対抗するためや、田んぼの泥の中を物ともせず進んでいく事から、この世のあらゆる障害に打ち勝つていく象徴とも、大きな角で大威徳明王の強さを示しているなど、いろいろの意味合いがあるようです。

最後に、腕が多くある仏様は大勢いますが、足が六本も生えている仏様は殆どいません。足が多い仏様を見かけたら、大威徳明王だと覚えてください。

：足が六本も有るとどうやって歩くのか少し気になります。
亮澄拝



京都府東寺
大威徳明王像

伝教大師の「命日」



仏教には灌仏会、成道会、涅槃会といった大きな行事があります。

が、六月四日の山家会、十一月二日の霜月会という行事がございます。霜月会是中国の高祖天台大師智顛のご命日、山家会は宗祖伝教大師最澄のご命日を偲ぶ日であり、「世の中に、山てふ山は多かれど、山とは比叡の御山をぞいふ」という言葉があるように、山家とは比叡山延暦寺を指す言葉なのです。

伝教大師は五十四歳(満五二歳)にてその生涯を終えますが、臨終の際には「我がために仏を作ることなかれ、我がために経を写すことなかれ、我が志を述べよ」という言葉を残されたことが伝わっております。とはいえ、後の千二百年にわたる引き継がれる、教えを説いた大師の徳を讃えずにはいられないのも、人の情なのではないでしょうか。

此則國寶

山門家傳

また、大師はこのような言葉も残されております。「一隅を照らす此れ則ち国宝なり」「己を忘れて他を利するは慈悲の極みなり」。現代を生きる私たちは大師のように千二百年に渡り多くの人々の心を照らすことは難しいことかもしれませんが、しなながら大切なことは光の大きさではなく、ほんの小さな隅でも構わない、いつもお世話になっている人の心をお返しを求めずその人の心を照らす光になれるのであれば、それは相手にとっても自分にとっても幸いな事なのかもしれません。



亮歌拝

梅をたくさん頂きました。

川崎國夫さんより梅を沢山頂きました。梅干しにして、来年の節分にお裾分けさせていただきます。

深大寺にて田植え式

先月末、調布市の姉妹都市である長野木島平村の村長、早乙女さんらが参加し、田植え式が行われました。秋に実った稲穂は、縁結びのお守りとして授与所に並ぶこととなります。

